

2016 年度（平成 28 年度）

事 業 報 告 書

－ 2017 年 6 月 13 日 －

公益財団法人国際高等研究所

事業報告書

目次

I. 2016 年度事業活動の概要（総括）	・・・ 1
II. 研究事業の推進	
1. 総括	・・・ 4
2. 基幹研究事業	・・・ 4
3. 研究プロジェクト事業	・・・ 4
4. 社会への問いかけ	・・・ 4
5. 研究プロジェクト事業	・・・ 5
6. 活動の基盤確保	・・・ 5
III. ソーシャル・コミュニケーション活動の企画・実行	
1. 「エジソンの会」の企画・開催	・・・ 5
2. 「ゲーテの会」の企画・運営	・・・ 6
3. IIAS 塾「ジュニアセミナー」の試行実施と事業概要	・・・ 7
4. 広報活動の推進	・・・ 8
IV. 法人運営の状況	
1. 戦略会議 IIAS Strategic Committee (ISC) 第 2 期の発足と審議の開始	・・・ 9
2. 諸規則・規程類の制定・改訂	・・・ 10
V. 財務・収支状況	
1. 経常収益の概要	・・・ 11
2. 経常費用の概要	・・・ 11
3. 最終収支	・・・ 11
4. 今後の見通し	・・・ 12
5. 債券の運用について	・・・ 12

公益財団法人国際高等研究所
2016年度(平成28年度)事業報告

I. 2016 年度（平成 28 年度）事業活動の概要（総括）

2015 年度にスタートした長尾真所長の下での事業活動は、新たに活動の基底とすべく設定された基幹プログラム群、さらに「けいはんなの知的ハブ」としての役割を実践するエジソンの会等、多角的かつ奥行きのあるものとして進められ、とくに 2016 年度においてはアニュアルレポートの発刊による社会への問いかけや多方面での産学公民との連携などを通じて、その活動をより実効あるものとしてきた。その結果、社会全体に対する高等研の存在意義ならびにけいはんな学研都市の可視化について、それらの向上と認知の拡大が大きく進んだ実りある一年となった。この間の長尾所長を中心とした研究体制の功績は非常に多大であったと言える。

『1』研究活動を中心とする事業展開

1. 基幹プログラムの重点化を柱とする研究活動

第 1 期戦略会議 ISC 答申において提言された 3 課題、及び、けいはんな学研都市の 30 年先の未来像を課題とする合計 4 課題を基幹プログラムと位置づけ、2015 年度より重点的に取り組んできた。

2016 年度は基幹プログラムの一旦の取りまとめとして、2015 年度に取りまとめられた「けいはんな学研都市の 30 年後に向けて」（「けいはんな未来」懇談会中間報告書）に加え、「将来の地球社会を考えた時の科学技術の在り方」、「循環型、定常経済社会の構築の必要性とその方策」、「多様な価値観を持つ社会や国家の平和的共存のための方策」の 3 プログラムにおいても中間報告書の取りまとめに着手した。

また、4 基幹プログラムの合同会議を設定し、4 件の基幹プログラムが一丸となることで、より大きな成果創出を目指す活動に着手した。

2. 新研究ドメイン（シンクタンク機能）の具現化に向けた取り組み

エジソンの会においてオープンイノベーションの創出活動を実践することで、シンポジウム開催やキュレーション機能の充実と練度の向上を図れたことで、シンクタンクとしての活動の礎を築くことができた。また、行政からの受託事業については今年度の具体的実行は叶わなかったものの、行政側の 2017 年度計画・予算について具体的な活動内容と併せて擦り合わせを行うことができた。

3. アライアンス関係の構築・強化

理化学研究所、京都府及び国際高等研究所は、科学技術イノベーション創出等に向けた相互の連携・協力に関する基本協定を 2016 年 5 月 24 日に締結した。さらに、人工知能、ビッグデータ、IoT、サイバーセキュリティをはじめとした広範な分野における共同研究や教育連携の促進等に係る奈良先端科学技術大学院大学、理化学研究所

及び国際高等研究所による相互協力に関する包括協定を 2016 年 12 月 19 日に締結した。その他、企業等との協業に向けた連携も積極的に進めた結果、複数の連携体制が構築できた。

4. ソーシャルコミュニケーション活動の充実と拡大

交流事業として定着した「ゲーテの会」については、その企画・運営が高く評価され、高等研の知的ハブとしての機能をけいはんな地区の幅広いステークホルダーに認知いただき、2016 年度末まで 45 回の開催に至った。

さらに、当該活動から派生した「IIAS 塾ジュニアセミナー」については、2016 年夏季及び 2017 年春季の 2 回開催で、年度内 2 回の定例開催への布石となり、関係者への浸透を図ることができた。

一方、人工知能（AI）を核とした「エジソンの会」の活動も 8 回に及ぶ大規模な会合を開催し、具体的な協業事例の創出に繋がる活動が展開できた。

以上の自主事業に加え、外部組織として発足した「グリーンイノベーションフォーラム」への支援・協力の成果として、新たな連携も生まれている。

5. 2015 年度アニュアルレポートの発行

高等研として過年度の研究活動およびその成果に基づき、社会に問いかける価値の高いコンテンツを造り込み、2015 年度版（2016 年 3 月度）アニュアルレポートとして 2016 年 7 月に発行した。

『2』法人運営

1. 第 2 期 ISC 活動

立石理事長からの「人文社会系の学と社会との乖離」および「新たな研究ドメインとプロセスの確立」というふたつの諮問に対して、深い議論が展開された。

「デモクラシー」と「ヒューマニティー」のふたつの観点から、社会との乖離を克服する存在としての人文社会科学のあり方等を答申すべく活動を進め、2017 年 3 月には報告書を取りまとめ、理事長への答申を行った。

2. 運用財産の見通しに基づく中長期に係る法人運営戦略策定に向けた取り組み

基本財産の運用益のみに依存せず、収支相償を実現するための取組みとして、シンクタンク型の受託事業の具体化などを積極的に進める一方、理事会における議論を重ね、中長期財政戦略の構築を進めた結果、2017 年度から「経営基盤委員会（仮称）」を創設し、第三者による議論に着手することとした。

3. 運用財産の見通しに基づく中長期に係る法人運営戦略策定に向けた取り組み

第 7 1 回評議員会（2015 年 6 月 29 日開催）における「2014 年度事業報告『VI. 財務・収支状況』4. 今後の見通し」において、公益を持続的に社会に提供するためのゴーイングコンサーンとして収支相償を実現するために、抜本的な法人運営戦略の

具体的な議論が必要との認識に基づき、第90回理事会（2015年9月15日開催）における、「高等研における中長期運営戦略について」と題する自由討議を皮切りに、中長期的な法人運営戦略に繋がる事業展開の在り方について検討を開始した。

これは、現在の基幹プログラムを中心とする研究ドメインに加えて、社会との連携の強化と収支相償を企図し、新たにシンクタンク型の研究ドメインを創設できないかと構想するものである。

さらに、このような新たな研究ドメインを実行に移す場合を想定して、クライアントとのインタフェースを果たし、受託研究を遂行するためのプロセスについての具体的な構築についても検討に着手する必要があると提案があった。

このような新たな事業展開のため、基幹プログラムを中心とする研究ドメインに加え、新たに、シンクタンク機能のための研究ドメインの在り方、運営方法、及び業務実行のプロセスについての検討を進めた。

4. 持続性ある組織づくりへの取り組み

ガバナンスの確立や持続的運営体制の構築に必要な諸規則・規程の制定については、その根幹部分の整備は2013年度に完了させ、2014年度以降においても引き続き運用実態に即した見直し等、よりよい運営に必要な調整を行っている。

2016年度は、未来に繋がる法人運営及び経営戦略を確固たるものにするため、大所高所から提言を行う「経営基盤委員会」を置くこととし、本委員会の設置方針を受け、経営基盤委員会設置運営規程を制定した。

また、職員の採用・育成計画を進め、持続性のある組織づくりに継続して取り組んだ。

5. 着実な資産運用

資産の短・中・長期の運用方針を検討した結果を踏まえ、2016年度に満期等の償還を迎えた2件、2億5千万円の保有債券の再運用を実施した。

Ⅱ. 研究事業の推進

1. 総括

第1期戦略会議ISC答申（2015年3月）で「高等研として取り組むべきこと」として提言された3課題、及び、けいはんな学研都市の中核機関として「けいはんな学研都市の今後30年を考える」ことが重要な使命であるとの認識に基づいて企画した1課題の、合計4課題を対象とする4つの基幹プログラムを主軸に、研究事業を推進した。

2. 基幹プログラム（付属明細書 1 参照）

2016年度は、基幹プログラムの一旦の取りまとめとして、2015年度に取りまとめられた「けいはんな学研都市の30年後に向けて」（「けいはんな未来」懇談会中間報告書）に加え、「将来の地球社会を考えた時の科学技術の在り方」、「循環型、定常経済社会の構築の必要性とその方策」、「多様な価値観を持つ社会や国家の平和的共存のための方策」の3プログラムにおいても中間報告の取りまとめに着手した。

- 将来の地球社会を考えた時の科学技術の在り方

研究会名：「21 世紀地球社会における科学技術のあり方」

研究代表者：有本 建男 国際高等研究所副所長

- 循環型、定常経済社会の構築の必要性とその方策

研究会名：「人類生存の持続可能性－2100 年価値軸の創造－」

研究代表者：佐和 隆光 国際高等研究所研究参与

- 多様な価値観を持つ社会や国家の平和的共存のための方策

研究会名：「多様性世界の平和的共生の方策」

研究代表者：位田 隆一 国際高等研究所副所長

- 「けいはんな未来」懇談会

研究代表者：松本 紘 国際高等研究所副所長

なお「循環型、定常経済社会の構築の必要性とその方策」プログラムについては、前年度に整えた研究体制をもとに、2016年度からの本格始動となった。

3. 研究プロジェクト（付属明細書 1 参照）

研究プロジェクトは、研究活動について基幹プログラムと両輪となり、相補的充実を図る中で独自性を発揮する事業と位置付けるものである。

従来の自主的な取り組みに加え、2013 年度から新たな試みとして研究プロジェクトの公募制度をスタートさせ、2014 年度研究プロジェクトの事業化において 5 件、2015 年度において 2 件の公募課題を採用した。初回公募課題は 2016 年度を以って当初の 3 年計画の終了年を迎えた。

研究活動の主体性確保や研究テーマの構築上の課題等が明らかになったことから、2016 年度は公募による研究プロジェクトの新規採用を見送った。2017 年度において公募のあり方を再検討する。

4. 包括的・横断的推進に向けた取り組み

2015 年度より新たな委員構成で始動した所長の諮問機関である研究企画推進会議において、引き続き研究事業全体に対する助言を得るとともに、基幹プログラムの合同会議を設定し、4 件の基幹プログラムが一丸となることで、より大きな成果創出を目指す活動をスタートさせた。

合同会議は、基幹プログラムの研究代表者及び研究会メンバーにより構成し、プログラム間の情報交換や相互交流及び全体調整の役割を担う。2016 年度は、基幹プログラム全体の目的の再確認、中間・最終報告の内容の検討、今後のロードマップ等について話し合い、各プログラムの活動及び中間報告に反映させるよう努めた。

5. 社会への問いかけ

高等研として過年度の研究活動およびその成果に基づき、2015 年度版アニュアルレポートを 2016 年 7 月に発行した。また、基幹プログラムの成果を社会に問いかける活動を 2017 年度に実施することを想定し、その企画準備を行った。

6. 基盤確保

文部科学省科学研究費補助金「特定奨励費」の 2016 年度交付額は 1,500 万円となった。研究事業名を「次世代に向けた学術の芽の発掘と育成に関する研究」とし 2015 年度に 3 年間の期間を想定して申請したものである。2016 年度はその 2 年目として各種プロジェクトの取り組み、基幹プログラム、研究プロジェクト、及びその他研究成果の取りまとめ等を当該補助金の対象事業として実施した。

III. ソーシャル・コミュニケーション活動の企画・実行

高等研の事業活動の状況や成果と社会とをつなぐソーシャル・コミュニケーション (Social Communication) 活動の必要性については、2015 年 3 月の第 1 期戦略会議 ISC 最終答申において提言された通りである。

ソーシャル・コミュニケーション活動では、高等研における事業活動やその成果を、社会の様々なステークホルダーに適切な形で届ける活動を種々のチャンネルや媒体を通じて展開する「社会への問いかけ」活動を充実・強化する重要な位置付けとして捉えて取り組んでいる。

1. 「エジソンの会」の企画・開催

エジソンの会は、けいはんな学研都市が標榜する「立地機関間の連携とそれによる成果の創出」を促進するために、高等研が知的ハブとしての役割を果たし、立地機関の研究者や技術者のコミュニティを形成し、具体的な「オープンイノベーション」の成功事例の確立に寄与することを目的として、2015 年度の準備活動を経て 2016 年 6 月 21 日（火）に正式発足し、本格的な活動を開始した。2016 年度事業活動の実施内容は下記のとおりである。

(1) AI の実用化に向けた勉強会の実施（付属明細書 2 参照）

2016 年度は会の正式発足後、月次会合を 8 回（詳細は別添参考資料掲載）と企画運営委員会を 2016 年 12 月 6 日（火）に 1 回開催した。

月次会合については、テーマ毎に AI 関連のオーソリティを招聘し、AI の現状についての知識、国研・大学の研究開発成果、IoT、ビッグデータ、Industry4.0 などの最新情報、AI をビジネスに活かす最先端企業の事例、AI がもたらす人文社会系への影響などを通して、参画されている様々なジャンルの企業・立地機関の方々ならびに行政の方々に対する情報の共有を行い、インタラクティブセッションを通して、AI についての知見を深めた。

(2) 個別グループでの共同研究の促進

AI を応用することに興味を持ち、協創に価値を見出される企業、機関を募り、理化学研究所等との連携により、個別グループでの共同研究に係る具体的活動（事前協議、調査共同研究、秘密保持契約の締結など）を促進した。

2017 年度は、AI について具体的な出口を見据えた研究開発を実践するために必要な内容を掘り下げて提案していくことに主眼を置き、企業・機関に属する様々な立場にある方々が、各々の部署や組織において、自ら AI を実践し、駆使した製品、サービスを具体的に生み出すことが出来るようになるための年間を通したテーマを設定する。具体的には最新の技術動向を掘り下げていく「テクノロジー」編と、AI を駆使した先端のソリューションやその課題を扱う「システム・社会」編から構成して会合を実施する予定である。

2. 「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ"ゲーテの会"」の企画・運営（付属明細書 2 参照）

知的連携のための土壌醸成及び知的連携の促進を図るために、「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ"ゲーテの会"」を 2013 年度に立ち上げ、原則として毎月の満月の夜に公開セミナーを企画・開催している。現在では、けいはんな学研都市に立地する法人や企業の関係者、近隣住人など、広く一般を対象とし、40 名程度を上限として参加者を募っているが、リピーターも増え、人的ネットワークに基づいて京都市内や大阪市内など、より広範囲の地域からの参加者も認められるようになった。

2015 年度は、ゲーテの会を発足させて 3 年目を迎えたことを踏まえ、「日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて」をメインテーマに掲げて、日本の近代化を導いた偉人の思想、行動の光と影を追う企画を展開した。2016 年度においても 2015 年度から引き続くメインテーマとして事業展開を図った。2016 年度末の段階で累計 45 回を数えた。2016 年度 12 回の実施状況については、別添参考資料に記載。

なお、当該ゲーテの会から得られた知的資産を次世代人材の育成に系統的に活用することを目指して、「ジュニアセミナー」等への事業展開を図っている。

3. IIAS 塾「ジュニアセミナー」の試行実施の継続と事業概要

現在社会にあって、科学技術至上主義や経済至上主義的風潮の下では、全人的な人間形成は困難となりつつあり、次代を拓くには、人間力の基礎をなす哲学（理性・感性）によって鍛えられた「独立自尊の志」を有する「全人」の養成が求められている状況に鑑み、高等研では、「ゲーテの会」の中から選りすぐりの講演をテキストとして起こして、受講生が、その講演をされた当該分野の第一人者とされる講師と直接語り合える「IIAS 塾ジュニアセミナー—独立自尊の志養成プログラム—」を開催し、次世代を担う人材育成のためのセミナーを

2015年度から行うこととした。

2016年度は、定例開催の布石とするべく、京都府、大阪府、奈良県の各教育委員会の後援並びに京都大学、大阪大学の協力を得て、夏季セミナーを8月3日（水）～5日（金）に、春季セミナーを2017年3月25日（土）～27日（月）にそれぞれ2泊3日の日程で開催し、公募により応募申請した高等学校の生徒延べ38名を受講生として受け入れた。

セミナーでは、思想・文学、政治・経済、科学・技術の各分野について講師の講演の後、論点整理（テーマ提案）を行い、若手研究者（大学院生他）の先導のもと、グループ討論を重ねた。講義による知識の獲得に焦点を当てるのではなく、その講義を題材として正解のない課題についてグループ討議を行い、討議を通じて多様な考え方をする他者の意見を受け入れて自分の考えをまとめる経験を踏まえ、受講生にとっては新たな視点や幅広い視野を獲得する意義を体得する非常に貴重な機会となったものと受け止めている。

なお、2017年春季セミナーでは、プログラムに交流・体験「大地との対話」を加え、受講生による耕作地での農業体験を交流体験「大地との対話」として実施し、農業指導者による特別講話とともに「独立自尊の志」養成プログラムの趣旨、人間力の基礎の鍛錬に繋げる実践的カリキュラムとした。

2016年度にセミナーを夏季と春季の2回開催したことを通じて得られた多くの知見が、2017年度以降の定例的かつ持続的開催に向けた礎になったと考えている。

（1）2016年夏季ジュニアセミナー

○講師とメインテキストのテーマ

1）思想・文学分野

講師：高橋 義人 京都大学名誉教授、平安女学院大学教授、

テーマ：森 鷗外に学ぶ～日本にも個人主義はありうるか～

2）政治・経済分野

講師：瀧井 一博 国際日本文化研究センター教授

テーマ：伊藤博文に学ぶ～「憲法政治」への道。「協働の憲法学」を今～

3）科学・技術分野

講師：佐藤 文隆 京都大学名誉教授

テーマ：湯川秀樹に学ぶ～科学(者)の輝きは社会の中でこそ。その価値を社会的共に～

○受講生の内訳

受講者が在籍する高等学校教員の推薦に基づく応募とし、受講生は、京都府域3校10名、大阪府域3校3名、奈良県域0校0名、内訳は、男子2名、女子11名。また、3年生3名、2年生7名、1年生3名の計13名であった。

（2）2017年春季ジュニアセミナー

○講師とメインテキストのテーマ

1）思想・文学分野

講師：田島 正樹 千葉大学文学部元教授

テーマ：宮沢賢治における《鉄道》

2) 政治・経済分野

講師：伊藤 之雄 京都大学大学院法学研究科教授

テーマ：原敬の理想

3) 科学・技術分野

講師：松居 竜五 龍谷大学国際学部教授

テーマ：南方熊楠のマンダラ的世界観の形成

～那智滞在期の思想とその前後をつなぐもの～

○受講生の内訳

受講者が在籍する高等学校教員の推薦に基づく応募とし、受講生は、京都府域 3 校 8 名、大阪府域 2 校 7 名、奈良県域 3 校 9 名、愛知県 1 校 1 名で内訳は、男子 9 名、女子 16 名。また、3 年生 2 名、2 年生 11 名、1 年生 12 名の計 25 名であった。

4. けいはんな若手研究者勉強会のバックアップ

2015 年度から開催されているけいはんな立地企業・機関の若手研究者・技術者の自主的な勉強会について、2016 年度においても継続して質の高い運営をサポートした。参加企業・機関は増加しており、それぞれの専門分野においても、バイオインフォマティクス、データ解析、デバイス、センシング、言語学、人工知能、脳機能情報、図書館情報学に加え、量子ビーム、ロボティクス、音声認識、歴史都市防災研究、国際公共政策、自治体の情報政策など多岐にわたる広がりを見せている。「情報と認知」について話題提供を行い、その後議論をする形式で実行しており、当該研究会からオープンイノベーションを牽引していく人材の発掘と把握を行っている。

5. 広報活動の推進

2016 年度の広報活動は、2015 年度に引き続き情報発信力に重点を置いて高等研の認知度の向上を図るための活動を進めた。交流事業の一環として推進してきた人的ネットワークを基に、京都府、京都大学、科学技術振興機構、関西文化学術研究都市推進機構などの関係機関の広報部門と、ポータルサイトへの情報掲載などの協力体制を築いた。

広報コンセプトを具体的な広報媒体や広報活動に反映し、メディアミックスを見直した上で効果的な発信を行うことを 2016 年度も引き続き目標として掲げ、広報戦略としての新たな手法や方策の検討を進めた。

(1) 研究活動の途中経過の中間とりまとめ

基幹プログラム「けいはんな未来懇談会」の中間報告書については、「けいはんな学研都市の 30 年後に向けて」と題して取りまとめを行い、2015 年度に既刊したが、これに加え、他の基幹プログラム 3 件「21 世紀地球社会における科学技術のあり方」、「人類生存の持続可能性－2100 年価値軸の創造－」及び「多様性世界の平和的共生の方策」の係る各研究会の中間報告を 2016 年度に取りまとめ、2017 年 6 月を目途に発行する準備を行った。

(2) アニュアルレポートの発行

けいはんな学研都市における知的ハブ活動など、幅広いソーシャル・コミュニケーション活動の成果をわかりやすく掲載することを目的として、2015 年度において事業活動の状

況を社会に訴求するためのアニュアルレポートの発行を初めて企画した。

2016 年度においても研究活動を中心として、その編纂に際しては、様々なステークホルダーに読んでいただき、理解を深めていただけるように、表現やアートディレクション上の工夫を図った。

高等研の基本理念や活動成果を一貫したコンセプトの下で、継続的に社会の様々なステークホルダーに訴求することも意図して実行するもので、2016 年度版は 2017 年 6 月末の発行を予定する。

IV. 法人運営の状況

1. 第 2 期戦略会議 IIAS Strategic Committee (ISC) における審議の継続

2015 年度は、立石理事長から第 2 期戦略会議 ISC (村上陽一郎議長) に対して諮問のあった『『人文社会系の学』と『社会』との乖離について』、及び「新たな研究ドメインとプロセスの確立について」の 2 つについて検討を開始し、そのアプローチの方向性や切り口を見定めた。

2016 年度はそこで検討された内容に基づき、高度に発展した科学技術がもたらす様々なベネフィットと同時に、地球社会と人類が様々な課題に直面するようになったという点についての問題意識や課題感を整理し、その大きな要因の一つとして、「人文社会系の学」が、その大きな役割である、「社会の価値を高め、円滑な活動に寄与していく」ということが果たせていないという現実について考察した。その上で、どのように立場の違いを乗り越え、意見の隔たりを埋め合わせるかという、社会の合意形成や意思決定のあり方、そこでの個人の尊厳をどう守るのかという人間の根本的な課題について賢慮すること、さらには「人文社会系の学」が発揮された新しい社会の姿はどのようなものかといったことについて議論を重ね、2017 年 3 月に答申として取りまとめた。

第 1 期戦略会議 ISC (長尾真議長) の答申に示された「高等研として取り組むべきこと」として提言されたものから設定された現在進行中の基幹プログラムについては、高等研の研究事業の中核をなす重要な柱 (大枠の研究ドメイン) として中長期的に継承されていくものと思料されるが、さらに第 2 期戦略会議 ISC の提言もそこに汲み入れて展開していくことで、基幹プログラムのさらなる充実を図っていきたい。

(1) 議長及び委員構成：

議長	村上陽一郎	東京大学名誉教授・国際基督教大学名誉教授
委員	猪木 武徳	大阪大学名誉教授・国際日本文化研究センター名誉教授
	大原謙一郎	公益財団法人大原美術館名誉理事長
	笠谷和比古	国際日本文化研究センター名誉教授
	黒木登志夫	日本学術振興会学術システム研究センター相談役

(2) 立石理事長からの諮問事項

立石理事長から、第 1 期 ISC 活動においても認識されていた課題認識を再整理したこと及び研究所運営の持続性確保の観点、大所高所からの示唆への期待から、2015 年度において第 2 期 ISC 村上議長に対して次の諮問が行われた。2016 年度においては、引き続き当該諮問内容に係る検討を重ねた。

1)「人文社会系の学」と「社会」との乖離

2) 新たな研究ドメインとプロセスの確立

(3) 会合開催：

第4回：2016年5月30日（月）10：00～13：00 @高等研セミナー室-1

第5回：2016年7月28日（木）12：00～14：45 @高等研セミナー室-1

第6回：2016年11月14日（月）16：30～20：00 @ホロンゲストハウス「怡園」

第7回：2017年3月24日（金）12：00～15：00 @高等研1階「和室」

今日の社会に対する課題認識を踏まえて検討した内容は、下記のとおりであり、報告書としてとりまとめた。

① 人文社会系の学と社会との乖離

② 人文社会系の学が果たすべき役割

③ 人文社会系の学が発揮された社会の姿

④ 高等研が新たに取り組むべき研究テーマ

⑤ 高等研の新たな研究ドメインとプロセスのあり方

2. 諸規則・規程類の制定・改訂

本法人の運営に関連して、ガバナンス及び内部統制システムの構築に係る基本方針の策定並びに法人運営に係る規則及び規程類の新規の整備方針を検討し、さらに法人運営の実態に鑑み、必要に応じて内容の見直しを図るため、下記の規則・規程類の制定及び改訂を図り、公益法人としての制度運営面の体制整備を図った。

(1)「経営基盤委員会設置運営規程」の新規制定

理事会において、持続可能な法人運営を目指し、経営課題を集中的に検討することの必要性を確認したことを受け、本法人の存在意義を検証及び評価し、未来に繋がる法人運営及び経営戦略を確固たるものにするため、大所高所から提言を行う「経営基盤委員会」を置くこととした。

本委員会の設置方針を受け、経営基盤委員会設置運営規程を2017年4月1日に施行することを踏まえ、同規程を2017年3月6日開催の第98回理事会において制定した。

VI. 財務・収支状況

1. 経常収益の概要

運用益について、基本財産受取利息では為替相場が予想より円高で推移したこと等により予算比 115 万 7 千円減の 5,044 万 3 千円となったが、受取配当金では予算比 59 万 2 千円増の 809 万 2 千円、特定資産運用益は微増の 20 万 4 千円となった。受取補助金等は、文部科学省からの科学研究費補助金（特定奨励費）であり受取国庫補助金として計上しているが、予算通りの 1,500 万円が交付された。また、受取寄付金のうち外部からの寄付金については、実現できなかった。

雑収益については、交流事業「けいはんなゲートの会」および「エジソンの会」の参加費や施設利用料の収益に加えて、理化学研究所との連携・共同研究に伴う施設利用負担金を計上したことにより、予算比 622 万 3 千円増の 752 万 4 千円となった。

なお、経常費用を賄うための収入不足を補填するため、研究事業推進基金を取り崩して受取寄付金等振替額として計上しているが、同振替額は 6,477 万 4 千円となり、これを含めた経常収益の合計は、1 億 4,604 万円となり予算比で 1,502 万 7 千円の減、前年度決算との比較では 148 万 4 千円の減少となった。

2. 経常費用の概要

経常費用のうち事業費は、研究事業に直接要する費用に、全体の管理に要する費用から研究事業に寄与する部分を配賦計算に基づき按分した金額を加えて事業費としている。従って、管理費は全体の管理に要する費用のうち、事業費に按分した残りを管理費として計上している。

事業費の内訳では、委託費として予算計上した費用のうち、アニュアルレポート作成費を印刷製本費として計上している。人件費のうち給料手当と旅費交通費、水道光熱費等が見込みを下回ったため、事業費の合計では予算比で 1,524 万 7 千円減の 1 億 7,411 万円となった。また、前年度決算比では 91 万 1 千円の減少となった。

管理費については、人件費等が見込みを下回ったため、管理費合計では 1,514 万 9 千円で、予算比 108 万 7 千円の減少となり、前年度決算比では 191 万 5 千円の減少となった。

この結果、経常費用の合計は、1 億 8,926 万 9 千円となり、予算比で 1,633 万 3 千円の減少となり、前年度決算比では 282 万 6 千円の減少となった。

3. 最終収支

年間収支を相償うため研究事業推進基金を取り崩して収入に補填する受取寄付金等振替額は、予算に比べ 1,896 万 2 千円減の 6,477 万 4 千円となり、前年度決算比では 227 万 8 千円の減少となった。

この結果、2016 年度の一般正味財産増減額は、 $\Delta 4,322$ 万 9 千円である。予算では $\Delta 4,453$ 万 5 千円であったので、予算比で減少幅が 130 万 6 千円縮小し、前年度決算比で減少幅が 145 万円 2 千円の縮小となった。また、基本財産と研究事業推進基金の増減を表す指定正味財産増減額は、 $\Delta 6,940$ 万 5 千円で、減少幅が予算比では 1,531 万 1 千円縮小し、前年度決算比で 2,192 万 7 千円縮小したことになる。

以上の増減額をあわせた正味財産期末残高は、48 億 6,925 万 6 千円となり、予算比で 1 億 2,133 万 4 千円の増加とはなったが、前年度決算比では 1 億 1,263 万 4 千円の減少であ

る。これは、研究事業推進基金の取り崩し、施設等の減価償却費、一部時価評価を行う投資有価証券の評価損等による。

4. 今後の見通し

2017 年度も、2016 年度と同様に研究事業推進基金を取崩す予定であり、2017 年度の取崩予定額 6,093 万 2 千円を差し引いた期末の研究事業推進基金の残高は、1,869 万円になる見込みで、2017 年度予算において、予算を上回る支出を伴うような万一の不測の事態が発生した場合には、運営資金が不足する恐れがあることも考えられる。この対応については、2017 年 3 月の理事会および評議員会での承認のとおり、基本財産を取り崩して研究事業推進基金に振替ることについて、必要に応じて理事会ならびに評議員会において決裁審議を求めることとする。

また、研究事業推進基金からの取り崩しが見込めない 2018 年度以降の財政計画については、同じく 2017 年 3 月の理事会および評議員会で設置を承認された「経営基盤委員会」の審議結果を基に、中長期財政計画として取りまとめるとともに、社会に認められ、必要とされる事業展開を充実強化していくことで、収支相償に向けた抜本的な取り組みを行うこととする。

5. 債券の運用について

2016 年度の基本財産として保有する債券の期日前償還ならびに満期償還によって、下の表のとおり再運用として 2 件の債券を基本財産として購入した。これ以外に、債券の満期償還金額のうち 1 億円については第 42 回資産運用委員会の承認を得て普通預金で保有している。

(2016 年度新規購入債券)

	銘柄	購入日	満期日	購入金額 (千円)	元本 (千円)
第 41 回資産 運用委員会	クレディスイス AG コーポレート債	2016/10/18	2036/9/25	150,000	150,000
第 42 回資産 運用委員会	カインテット シーズ 70061	2017/3/30	2041/2/17	100,000	100,000
	計			250,000	250,000

また、2017 年度においては基本財産として保有する債券 1 銘柄が満期償還となるので、資産運用委員会にて検討の上、効率的な再運用を図って行くものとする。

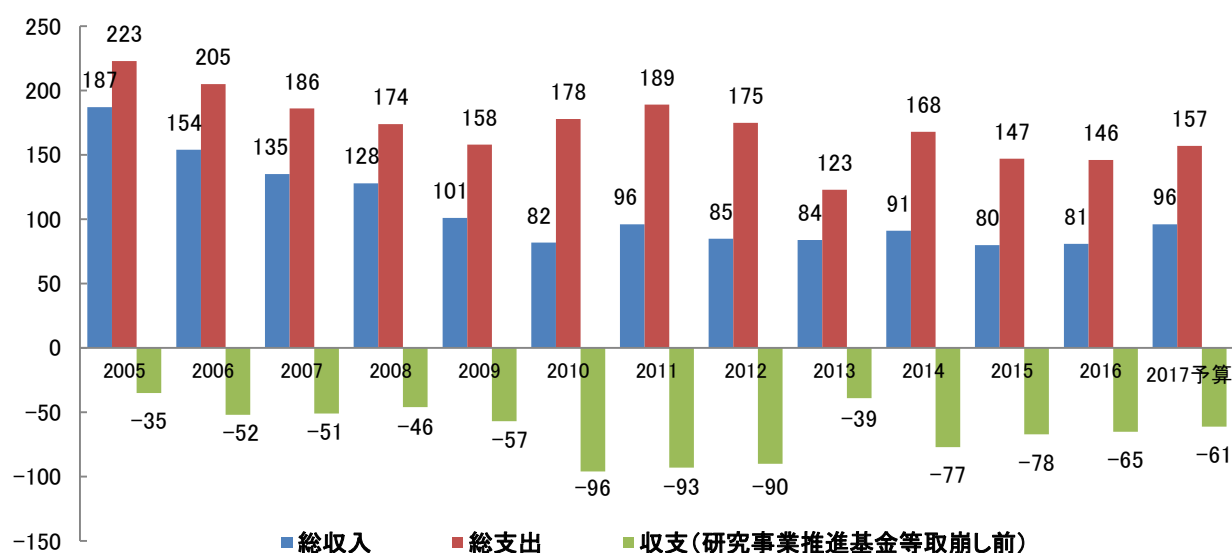
(2017 年度満期予定債券)

銘柄	元本(円)	満期日
第 879 回公営企業債券	100,000,000	2017/9/19

参考 1. 収支構造（資金増減ベース）

- ・ 収支のマイナスギャップは、過去 2004 年度から継続。
- ・ 安全性最重視の資金運用シフトにより、利息収入が低迷する中、支出の抑制に努めるも、研究事業推進基金の取崩による事業運営が継続。
- ・ 2017 年度は、収支差 6,093 万 2 千円の計上を見込む。

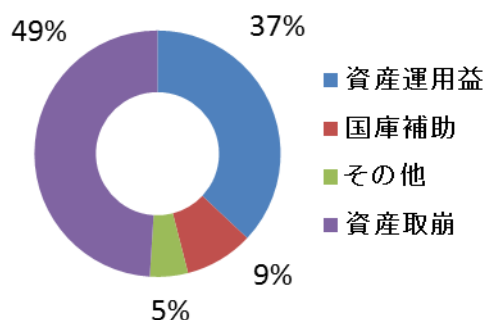
高等研 収支実績推移（単位：百万円）



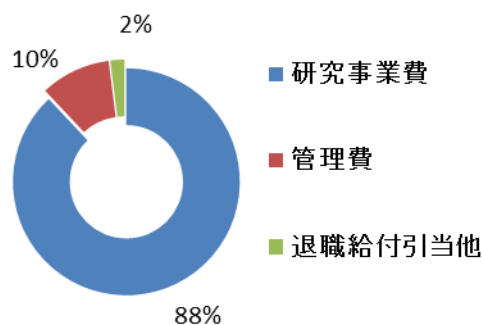
参考 2. 財団保有金融資産の推移と主要収入の推移

- ・ 収支構造としては、事業費支出（88%）と管理費支出（11%）が支出の大半を占めている。また、調達としては資産運用益が（38%）と国庫補助金（10%）のほか、49%は資産取崩によって支えられている財務構造にある。

調達構成比



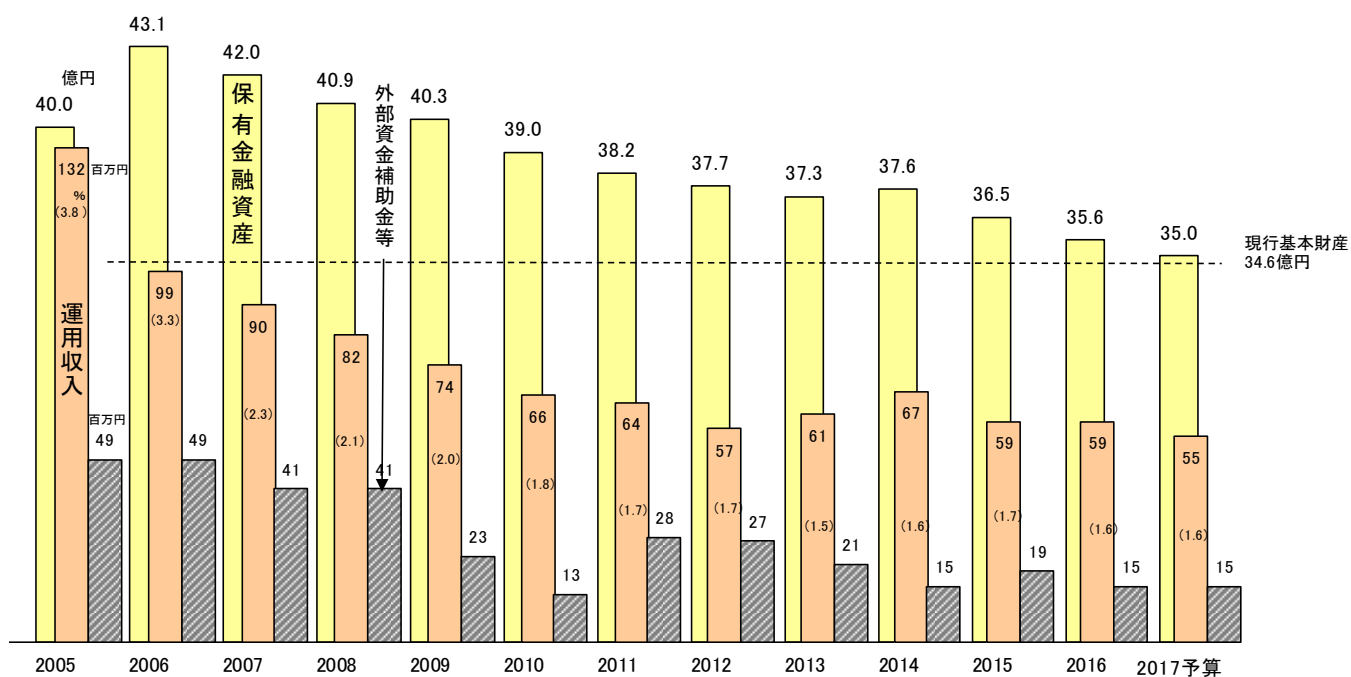
構成比



低金利状況が続く中、「資産運用基準」に則り収入の確保に努めているが、かつては利回り率 4.1%（2003 年度）であった運用も、安全性を配慮した運用の結果、2016 年度の利回り率は 1.6%の水準となり、運用収入は大幅に減少傾向が続いている。

現在保有している金融資産は 35 億 7 千万円であるが、この内、取崩可能な研究事業推進基金は 4,439 万 8 千円である。

保有金融資産、主要収入の推移



注 運用方針

格付機関:「A」評価のものとする。又、リスク管理の視点から「海外債券」から「国内債券」へ現状の保有 26 債券のうち、海外債券は 7 件、残る 19 件は国債、地方債、社債、仕組債等の国内債券に投資。

付属明細書 1

公益財団法人国際高等研究所 2016 年度事業報告Ⅱ．研究事業の推進

1. 基幹プログラム	1
(1) 将来の地球社会を考えた時の科学技術の在り方	1
(2) 循環型、定常経済社会の構築の必要性とその方策	2
(3) 多様な価値観を持つ社会や国家の平和的共存のための方策	3
(4) 「けいはんな未来」懇談会	4
2. 研究プロジェクト	6
(1) 領域横断型の生命倫理プラットフォームの形成に向けて	6
(2) 人工知能に関する問題発掘型対話基盤と新たな価値観の創出	7
(3) 精神発達障害から考察する decision making の分子的基盤	8
(4) 生命活動を生体分子への修飾から俯瞰する	9
(5) 設計哲学	10
(6) 総合コミュニケーション学	11
3. 研究企画推進会議	12
4. 基幹プログラム合同会議	13

1. 基幹プログラム

(1) 将来の地球社会を考えた時の科学技術の在り方

「21 世紀地球社会における科学技術のあり方」研究会

1) 目的

現在、科学技術研究体制のグローバル化、デジタル技術の革新的進歩、社会経済が解決すべき課題の複雑化・グローバル化、社会経済的価値創造と科学技術研究の接近といった状況の下で、数百年のスパンで築かれてきた近代科学の方法とその思想的枠組みが大きな転換期を迎えている。

この問題については世界の各所で様々な議論が行われているが、これらを歴史的かつ同時代的に俯瞰するとともに、学問とは何か、科学技術とは何か、大学とは何かといった根本的問題についても再検討する。その中で特に迫りくる有限資源の地球、深刻な環境破壊・汚染といった地球社会が直面している問題を前にして、科学技術活動をどのようにすべきかを具体的に検討することが大切である。そして世の中に問いかける活動をする。

2) 研究代表者

有本 建男 国際高等研究所副所長、政策研究大学院大学教授

3) 研究メンバー

小寺 秀俊 京都大学大学院工学研究科教授

大竹 暁 科学技術振興機構上席フェロー、東京大学政策ビジョン研究センター客員教授

隠岐さや香 名古屋大学大学院経済学研究科教授

狩野 光伸 岡山大学副理事・大学院医歯薬学総合研究科副研究科長・教授

駒井 章治 奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科准教授

宮野 公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授

4) 研究実績

2016 年度は 5 回の研究会を通し、地球社会が直面している問題を前にして、科学技術活動をどのようにすべきかについて議論を進めた。そのうち 2 回については、モンテ・カセム氏（立命館国際平和ミュージアム館長）と広井良典氏（京都大学こころの未来研究センター教授）に、有限資源の地球において今後どのような社会を目指すのかについて、時間軸の長い視点から講演をしていただいた。

また、前年度に引き続き、毎月「若手研究者の対話 ―境界を越える新しい学術領域の模索―」を行った。毎回一人のスピーカーに自らの研究の魅力を発表してもらい、その後、新しい学術領域の模索・開拓について話し合い、科学者コミュニティの再構築を目指す試みである。

これらの活動を踏まえ中間報告に着手、2017 年 6 月の発行に向け作成を進めている。

5) 研究会等開催

①研究会

第 1 回研究会：5 月 12 日（木）@科学技術振興機構東京別館

第 2 回研究会：8 月 1 日（月）@国際高等研究所

第 3 回研究会：9 月 5 日（月）@京都私学会館

第 4 回研究会：10 月 28 日（金）@科学技術振興機構東京別館

第 5 回研究会：2017 年 2 月 3 日（金）@キャンパスプラザ京都

②若手研究者の対話

- 第1回：4月21日（木）@国際高等研究所
- 第2回：5月19日（木）@国際高等研究所
- 第3回：6月23日（木）@国際高等研究所
- 第4回：7月28日（木）@国際高等研究所
- 第5回：8月23日（火）@国際高等研究所
- 第6回：9月29日（木）@国際高等研究所
- 第7回：10月27日（木）@国際高等研究所
- 第8回：11月25日（金）@京都大学
- 第9回：2017年1月27日（金）@国際高等研究所

（2）循環型、定常経済社会の構築の必要性和その方策

「人類生存の持続可能性－2100年価値軸の創造－」研究会

1) 目的

人類にとって差し迫った課題である有限資源の地球を考えた時、資本の飽くなき富の追求という現代資本主義の形態のままで行けば、地球資源の枯渇を招き、貧富の差を拡大し、人類に早期の破滅をもたらすことは明らかである。したがって進歩発展という概念を越えて、定常的、循環的な経済、持続可能な社会を構築し、貧富の格差を出来るだけ縮小し、文化的な生活を保障する社会にしてゆくべきであろう。その姿とそこに軟着陸してゆくための方策を検討する。

そのためには循環ということの定義とその具体的内容を明確にすることが必要である。そして循環の度合い、すなわち循環率を計算できるようにし、これを各国、各社会、あるいは各分野に適用し、循環率の低い社会あるいは分野はどこに原因があるかを明らかにし、制度的、科学技術的に改善できるよう検討する。そのためには、種々の社会的、政治的な枠組みや規制、あるいは解決のための科学技術等を国際的に作ってゆく必要があり、これを政策的立場から検討する。

2) 研究代表者

佐和 隆光 国際高等研究所研究参与、滋賀大学特別招聘教授

3) 研究メンバー

一方井誠治 武蔵野大学大学院環境学研究科長・教授
 加藤 博和 名古屋大学大学院環境学研究科教授
 倉阪 秀史 千葉大学大学院社会科学研究院教授
 小西 哲之 京都大学エネルギー理工学研究所教授
 佐々木典士 ミニマリスト・作家・編集者
 高村ゆかり 名古屋大学大学院環境学研究科教授

4) 研究実績

2016年度は本格的な研究を再開させ、合宿形式を含む7回の研究会を開催した。毎回、研究メンバー数名による話題提供をもとに、脅かされる人類生存の持続可能性を担保するために、あるべき科学技術と社会システム改編の方策について、議論を積み重ねた。これらを踏まえ中間報告に着手、2017年6月の発行に向け作成を進めている。

5) 研究会開催

- 第1回研究会：4月29日（金）～30日（土）@国際高等研究所
- 第2回研究会：7月27日（水）@国際高等研究所
- 第3回研究会：9月4日（日）@国際高等研究所
- 第4回研究会：10月23日（日）@国際高等研究所

第5回研究会：12月17日（土）@国際高等研究所

第6回研究会：2017年1月22日（日）@国際高等研究所

第7回研究会：2017年3月20日（月）@一橋講堂

（3）多様な価値観を持つ社会や国家の平和的共存のための方策

「多様性世界の平和的共生の方策」研究会

1) 目的

種々の考え方、多様な価値観、倫理観、宗教等を持つ人々や社会、国家が平和的に共存できない原因は何か。その原因を取り除くための方策、そこから平和的共存に到る道をどうすれば描けるかについて検討する。そのためにも現在広く使われている経済活動の指標であるGDPに代わる人間中心の価値観に基づく指標を検討し、これを世界的に議論するネットワークを構築する。そこでは有限の地球資源を大切にしたい循環型、定常経済社会と、価値観、倫理観、宗教等の違いを克服して人々が平和共存できるための方策という視点を重視する。

この課題は極めて困難なもののように思われるだろうが、人類はこれまで倫理、道德、あるいは宗教などによって克服する努力をしてきた。類似の課題は既に世界の各所で取り上げられ議論されているので、まず、これらを集積し俯瞰的に検討する。寛容と協調、互恵の精神を基盤に持つ日本において検討することによって、他にない観点からの提案ができ、世界におけるこの種の議論をリードすることができる。

2) 研究代表者

位田 隆一 国際高等研究所副所長、滋賀大学学長

3) 研究メンバー

吾郷 真一 立命館大学法学部教授

大芝 亮 青山学院大学国際政治経済学部教授

高阪 章 大阪大学大学院国際公共政策研究科（名誉教授）

内藤 正典 同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科教授

中西 久枝 同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科教授

中西 寛 京都大学公共政策大学院教授

東 大作 上智大学グローバル教育センター准教授

福島安紀子 青山学院大学地球社会共生学部教授

星野 俊也 大阪大学大学院国際公共政策研究科教授

峯 陽一 同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科教授

最上 敏樹 早稲田大学政治経済学部教授

モジュタバ・サドリア Director, Think Tank for Knowledge Excellence

モンテ・カセム 立命館大学国際平和ミュージアム館長

前田 直子 京都女子大学法学部准教授

4) 研究実績

2016年度は、前年度の検討により整理された「多様性社会の平和的共生」の概念の枠組み・指標の骨格を踏まえ、新たな指標の具体化を試みた。また、パイロット・スタディの一環として海外での現地調査を実施し、本基幹プログラムを多角的に展開するために、競争的外部資金の導入を検討し、2017年度以降の申請に向け、申請書の原案を作成した。これらを踏まえ中間報告に着手、2017年6月の発行に向け作成を進めている。

5) 研究会開催

第1回研究会：9月15日（木）@キャンパスプラザ京都

(4) 「けいはんな未来」懇談会

1) 目的

けいはんな学研都市は最初の街びらきから 30 余年が経過し、およそ 10 年ごとに目指すところを設定し、今日までに 3 つのステージを経て進化を重ねてきたが、2016 年度から次の 10 年を築く新たなステージを迎える。けいはんな学研都市では、土地・道路の造成、研究施設の誘致・建設といったハード面の整備は継続しつつ、この街の未来に向けては、この 30 年間の様々な変化を反映しながらも、「当初のミッションをいかに実践していくか」というソフト面も充実させるべき時期に移行してきている。

30 年先となれば、地球資源の枯渇、人口や環境問題などがより深刻になっており、これまでのような進歩発展史観は成り立たず、資源の循環的で効率的な利用、定常経済社会の実現を目指していくことになるだろう。そういった未来に軟着陸していくため、科学技術や経済、産業、その他社会活動が如何にあるべきかについて真剣に議論し、検討することが求められている。

そのような背景のもと、「何を研究するかを研究する」ために設立された高等研として、「けいはんな学研都市の 30 年後に向けたコンセプト」の構築のために英知を結集していくことがまさにその使命であると捉え、「けいはんな未来」懇談会（以下、「未来懇」）を主催することとした。けいはんな学研都市のこれから 10 年の計画を作成するタイミングで、その活動と並行して、30 年先の未来における社会のありようを見極めバックキャストにこの街のあるべき姿を描く未来懇により、この街の未来に寄与することを目的とする。

2) 研究代表者

松本 紘 国際高等研究所副所長、理化学研究所理事長

3) 研究メンバー

荒井 正吾 奈良県知事

依田 高典 京都大学大学院経済学研究科教授・副研究科長

大竹 伸一 西日本電信電話株式会社相談役

柏原 康夫 関西文化学術研究都市推進機構理事長、株式会社京都銀行相談役

平田 康夫 株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）代表取締役社長

山下 晃正 京都府副知事

【専門検討部会】

浅野 誠 奈良県産業・雇用振興部産業振興総合センター生活・産業技術研究部長

池田 一也 京田辺市企画政策部企画調整室担当課長

大原 真仁 精華町総務部企画調整課長

尾崎 元紀 木津川市マチオモイ部次長学研企画課長事務取扱

加藤 博和 名古屋大学大学院環境学研究科教授

北田 守一 生駒市都市整備部次長

小山 宏 奈良市総合政策部参事

坂野 寿和 株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）事業開発室 担当部長

高見 茂 京都大学白眉センタープログラムマネージャー（座長）

高橋 賢藏 サントリーホールディング株式会社顧問、

サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社取締役会長

中村 佳正 京都大学学際融合教育研究推進センター長・大学院情報学研究科教授

檜舘 孝寿 株式会社京都総合経済研究所取締役調査部長

藤岡 栄 京都府商工労働観光部文化学術研究都市推進課長
前田 英作 NTT コミュニケーション科学基礎研究所所長
村田 崇 奈良県地域振興部部長

4) 研究実績

2016 年度は、前年度に実施した懇談会を通して打ち出されたけいはんな学研都市の 30 年後の方向性に沿って、30 年先を予測しあるべき未来に向けての戦略策定を行うために、専門検討部会を設置し、新たに 15 名の部会メンバーを委嘱して集中的な検討を行った。

30 年後は、けいはんな学研都市においても、大きな変化が待っていると考えられる。サイエンスシティとしての繁栄のみならず、市民が安寧・幸福に暮らす持続可能な街づくりを行うためには、どこに着目し、何をなすべきか。

専門検討部会では、①研究・開発、②産業、③文化・芸術、④教育、⑤住民生活、⑥都市基盤の観点から検討を進め、30 年後のけいはんな学研都市のあるべき姿を 6 つに集約し、その実現のための課題と戦略を提言として取りまとめた。

5) 研究会開催

①研究会

第 1 回研究会：6 月 13 日（月）@国際高等研究所

第 2 回研究会：7 月 11 日（月）@国際高等研究所

②専門検討部会

第 1 回専門検討部会：8 月 22 日（月）@国際高等研究所

第 2 回専門検討部会：10 月 18 日（火）@国際高等研究所

第 3 回専門検討部会：11 月 30 日（火）@国際高等研究所

第 4 回専門検討部会：2017 年 2 月 6 日（月）@国際高等研究所

2. 研究プロジェクト

(1) 領域横断型の生命倫理プラットフォームの形成に向けて（2015 年度採択）

1) 目的

近年、社会的に注目されている課題として、出生前診断や代理母を含む生殖補助医療、終末期医療、再生医療研究、医学研究者の不正行為など、いわゆる生命倫理(bioethics)の諸課題がある。今日こうした問題は国際的にも日本においても重要な課題であるものの、とりわけ日本においてはこれらのテーマに関する領域横断型の研究・教育体制作りが遅れてきた。そこで本プロジェクトでは、国際的な生命倫理学の研究・教育拠点を日本に作るべく、その基盤となる生命倫理プラットフォームの形成を図ることを目的とする。

2) 研究代表者

児玉 聡 京都大学大学院文学研究科准教授

3) 研究メンバー

伊勢田哲治 京都大学大学院文学研究科准教授

位田 隆一 国際高等研究所副所長、滋賀大学学長

一家 綱邦 国立精神・神経医療研究センタートランスレーショナル・メディカルセンター倫理相談・教育研修室長

伊藤 達也 京都大学医学部附属病院講師

木村 敦子 京都大学大学院法学研究科准教授

齋藤 信也 岡山大学大学院保健学研究科教授

佐藤 恵子 京都大学医学部附属病院特定准教授

下妻晃二郎 立命館大学生命科学部教授

鈴木 美香 京都大学 iPS 細胞研究所特定研究員

竹之内沙弥香 京都大学医学部附属病院特定講師

鶴山 竜昭 京都大学大学院医学研究科准教授

戸田聡一郎 東北大学病院臨床研究推進センター特任助教

長尾 式子 北里大学看護学部看護システム学准教授

錦織 宏 京都大学大学院医学研究科准教授

野崎亜紀子 京都薬科大学薬学部教授

服部 高宏 京都大学法学系（大学院法学研究科）教授

東島 仁 山口大学国際総合科学部講師

松村 由美 京都大学大学院医学研究科准教授

三成 寿作 大阪大学大学院医学系研究科助教

4) 研究実績

第 1 回研究会として開催した「終末期医療と臨床倫理支援の国際ワークショップ」では、日本でも近年大きな問題となっている治療の差し控えや中止の是非、またそれを可能にする制度設計のあり方を議論した。参加者は約 30 名、英国、韓国、台湾の研究者も交え、活発な議論となった。

第 2 回研究会は「医学研究費に関する諸問題および医療資源の配分の倫理」をテーマとした。研究者や行政官など約 20 名が参加し、研究のパトロネージ、研究費の分配基準、医療資源の配分などの課題について、内外の先行事例を参考に、日本の今後のあり方を話し合った。

これらの活動の報告はウェブに掲載している。前年度に続き、2016 年度も関西圏を中心とした生命倫理のプラットフォームの形成に向けた基盤作りに努めた。

5) 研究会開催

第1回研究会：2016年4月22日（金）～23日（土）@国際高等研究所

第2回研究会：2017年1月28日（土）～29日（日）@国際高等研究所

（2）人工知能に関する問題発掘型対話基盤と新たな価値観の創出（2015年度採択）

1) 目的

本プロジェクトの意義は、現場で技術を作り出している若手・中堅の人工知能研究者が人文・社会科学の研究者と対話することによって、技術の設計・思想段階から有機的に結び付き、新たな概念や技術へのアプローチ法を模索することにある。

①人文・社会学者による ELSI 調査グループ、②人工知能研究者による AI 社会応用調査グループ、③科学技術社会論や科学コミュニケーションを専門とする対話基盤設計グループを設け、人工知能の社会的影響を議論し、a) 政府による干渉や産業による利益誘導に左右されない、異分野間の対話・交流を促すための媒体や基盤を構築し、b) 人工知能の目指すべき共通アジェンダや社会の未来ビジョンを設計し、技術開発・実装時の新設計基準や規範・倫理・制度に関する価値観を提案することを目的とする。

2) 研究代表者

江間 有沙 東京大学教養学部附属教養教育高度化機構特任講師

3) 研究メンバー

秋谷 直矩 山口大学国際総合科学部助教
市瀬龍太郎 国立情報学研究所情報学プリンシプル研究系准教授
大澤 博隆 筑波大学システム情報系助教
大谷 卓史 吉備国際大学アニメーション文化学部准教授
神崎 宣次 南山大学国際教養学部教授
久木田水生 名古屋大学大学院情報科学研究科准教授
久保 明教 一橋大学大学院社会学研究科准教授
駒谷 和範 大阪大学産業科学研究所教授
西條 玲奈 京都学園大学経営経済学部非常勤講師
田中 幹人 早稲田大学政治経済学術院准教授
服部 宏充 立命館大学情報理工学部准教授
本田康二郎 金沢医科大学一般教育機構講師
宮野 公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授
八代 嘉美 京都大学 iPS 細胞研究所特定准教授
吉澤 剛 大阪大学大学院医学系研究科准教授
吉添 衛 立命館大学大学院情報理工学研究科博士前期課程

4) 研究実績

2015年度からの継続調査として以下を行った。(1) 中島秀之氏（東京大学情報理工学系研究科・特任教授：人工知能）と水谷雅彦氏（京都大学大学院文学研究科・教授：倫理学）へのインタビューを通し、オーラルヒストリー調査を行った。「AIR 温故知新プロジェクト：オーラルヒストリーシリーズ」として、書き起こしデータをウェブで公開する予定である。(2) 研究者が研究開発の過程から対話の機会を得、異なる価値観に触れる「多様な価値観への気づきを与える対話型システム」の構築に向け、議論を行ってきた。(3) 研究ネットワークを広げるため、学会でのオーガナイズドセッションの企画やアイディアブレインストーミングワークショップ等を開催した。

5) 研究会等開催

①グループミーティング

- 第1回：5月12日（木）@国立情報学研究所
- 第2回：6月23日（木）@京都大学学術研究支援セミナールーム
- 第3回：6月29日（水）@東京大学アドバンス・リサーチ・ラボラトリー
- 第4回：7月22日（金）@東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター
- 第5回：8月23日（火）@京都大学学術研究支援セミナールーム
- 第6回：9月23日（金）@京都大学大学院文学研究科
- 第7回：10月19日（水）@立命館大学東京オフィス
- 第8回：11月30日（水）@名古屋大学
- 第9回：2017年1月9日（月）@会議室のルビコン 201
- 第10回：2017年1月14日（土）@政策研究大学院大学
- 第11回：2017年2月2日（木）@京都大学白眉センター

(3) 精神発達障害から考察する decision making の分子的基盤（2014年度採択）

1) 目的

自閉症・精神発達遅滞等の発達障害の中核をなす意思決定、コミュニケーション能力の障害について、その神経科学的基盤を解明することは、発達障害の治療法、予防法の開発にとってきわめて重要である。本研究は、ヒトの精神発達障害の分子病態機序を読み解くアプローチ、実験動物を用いて脳の高次機能を読み解くボトムアップアプローチ、霊長類を用いたトップダウンアプローチ、という3つのアプローチが交叉する領域に注目し、意思決定機構・コミュニケーション機構等における障害の分子機構を明らかにすることを目的とする。

2) 研究代表者

辻 省次 東京大学大学院医学系研究科教授

3) 研究メンバー

磯田 昌岐	自然科学研究機構生理学研究所教授
井ノ口 馨	富山大学大学院医学薬学研究部教授
入来 篤史	理化学研究所脳科学総合研究センターシニアチームリーダー
岡本 仁	理化学研究所脳科学総合研究センター副センター長
尾崎 紀夫	名古屋大学大学院医学研究科教授
影山龍一郎	京都大学ウイルス研究所教授・物質－細胞統合システム拠点副拠点長
北澤 茂	大阪大学大学院生命機能研究科教授
坂上 雅道	玉川大学脳科学研究所教授
坂野 仁	福井大学医学部特命教授・東京大学名誉教授
東原 和成	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
内匠 透	理化学研究所脳科学総合研究センターシニアチームリーダー
銅谷 賢治	沖縄科学技術大学院大学神経計算ユニット教授
松崎 秀夫	福井大学子どものこころの発達研究センター教授
宮川 剛	藤田保健衛生大学総合医科学研究科教授
山田真希子	量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所脳機能イメージング研究部チームリーダー
吉川 武男	理化学研究所脳科学総合研究センターシニアチームリーダー
渡邊 大	京都大学大学院医学研究科教授

川人 光男 国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) 脳情報通信総合研究所所長

4) 研究実績

2016 年度は 3 年間の総括として、脳の疾患を基盤とした分子遺伝学的研究、及び神経細胞、回路、個体という階層的な脳機能にける脳の意味決定機構の研究について、研究メンバーから話題提供をしてもらい、学際性の高い研究分野の構築を目指し異分野の研究者が活発に討議した。

5) 研究会開催

第 1 回研究会：2017 年 2 月 18 日（土）～19 日（日）@国際高等研究所

(4) 生命活動を生体分子への修飾から俯瞰する (2014 年度採択)

1) 目的

タンパク質、DNA、脂質などの生体高分子は化学修飾によって機能発現が調節されている。修飾する因子、様式は多様で、それによって機能制御メカニズムも異なるが、生化学的な視点からは多くの共通点も存在する。本研究では、生体高分子の修飾に関して従来は相互の接触が十分ではなかった研究者が一堂に会し、修飾の特徴、役割の観点から多様な生命現象の制御機構について議論し、生命科学に新たな視点を提供することを目指す。

2) 研究代表者

岩井 一宏 京都大学大学院医学研究科教授

3) 研究メンバー

有田 誠 理化学研究所統合生命医科学研究センター チームリーダー

五十嵐和彦 東北大学大学院医学系研究科教授

石濱 泰 京都大学大学院薬学研究科教授

稲田 利文 東北大学大学院薬学系研究科教授

大隅 良典 東京工業大学科学技術創成研究院特任教授

木下タロウ 大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授

田中 啓二 東京都医学総合研究所所長

白川 昌宏 京都大学大学院工学研究科教授

鈴木 聡 神戸大学大学院医学研究科教授・九州大学生体防御医学研究所客員教授

仲野 徹 大阪大学大学院生命機能研究科教授

西田 栄介 京都大学大学院生命科学研究科教授

山本 雅 沖縄科学技術大学院大学細胞シグナルユニット教授

吉田 稔 理化学研究所吉田化学遺伝学研究室主任研究員

4) 研究実績

過去 2 年間の議論から、制御対象となる生命現象に応じて、それに適した修飾因子、修飾様式が選択される理由の推測が可能な段階に至っていないと想定された。そこで本年度は、主たる機能分子であり種々の生命現象で状況に応じて可逆的に修飾されるタンパク質に焦点を絞って、修飾によるタンパク質機能制御に関する研究を展開している研究者に話題提供をお願いした。

3 年間の研究を通して、ある特定の生命現象の制御に特有の修飾が選択される理由を推測するためのデータが不足していることが明確となった。その達成には、種々の生命現象が惹起された場合に、経時的にかつ高感度、再現性高く複数の修飾因子による修飾を検出し、それらの膨大なデータからそれぞれの生命現象のキーとなる修飾を発見する手法の樹立が不可避である。2016 年度は上記を踏まえ、修飾による生物の主たる機能分

子であり、種々の生命現象で数多くの修飾を受けるタンパク質の機能制御に争点を絞って議論を深めた。

5) 研究会開催

第1回研究会：2017年1月23日（月）～24日（火）@国際高等研究所

(5) 設計哲学—俯瞰的価値理解に基づく、人工財の創出と活用による持続可能社会を目指して—（2014年度採択）

1) 目的

人間社会は歴史的に多種多様な人工財（モノ、コト、サービス、インフラ、組織、仕組み、社会、法体系など）を創出・構成してきた（即ち広義の設計とその利用）。近年、設計を取り巻く諸環境の急速な変貌に伴い、それに適応した社会の価値観に基づく設計の進화가求められている。本研究では、社会の価値観と設計との相互の関係を俯瞰し、今後の設計の在り方を含む設計倫理の在り方を検討する。ケーススタディとして、日本と発展途上国における人工財にまつわる環境問題を想定し、両社会を比較することで社会の価値観と設計との相互の関係を明示化することを試みる。

2) 研究代表者

梅田 靖 東京大学大学院工学系研究科教授

3) 研究メンバー

岩田 一明 大阪大学名誉教授・神戸大学名誉教授

上須 道德 大阪大学環境イノベーションデザインセンター特任准教授

苅阪 直行 京都大学名誉教授・日本学士院会員

小野里雅彦 北海道大学大学院情報科学研究科教授

思 沁夫 大阪大学グローバルイニシアティブ・センター特任准教授

住村 欣範 大阪大学グローバルイニシアティブ・センター准教授

田中 直 特定非営利活動法人 APEX 代表理事

中島 秀人 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授

服部 高宏 京都大学法学系（大学院法学研究科）教授

平田 収正 大阪大学大学院薬学研究科教授

堀 浩一 東京大学大学院工学系研究科教授

村田 純一 立正大学文学部教授・東京大学名誉教授

阿部 朋恒 首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程、国立民族学博物館
特別共同利用研究員(RA)

4) 研究実績

2016年度は、過去2年の研究を基にした出版物の内容検討を中心に活動を行った。その結果、人工知能、自動運転車、遺伝子改変技術、抗生物質耐性菌など最近注目を集めているトピックを挙げるまでもなく、人間が生み出す人工財についての倫理、すなわち、設計倫理を検討することの重要性を再確認した。さらに、設計倫理は設計者のみが考えるというよりは、人工財に関わる全てのステークホルダー間でコンセンサスを得るべき問題であること、技術と倫理は不可分であり、設計者、使用者、人工財の三者関係の視点で整理できそうなことが明らかになった。工学的に明確な枠組を示すところまでは検討の余地を残すが、本研究会の議論の成果は出版物の中で明らかにできている。

5) 研究会開催

①研究会

第1回研究会：2016年6月24日（金）～25日（土）@国際高等研究所

第2回研究会：11月4日（金）～5日（土）@グランフロント大阪

第3回研究会：2017年1月27日（金）～28日（土）@国際高等研究所

②グループミーティング

第1回グループミーティング：8月4日（木）@大阪大学豊中キャンパス

第2回グループミーティング：9月30日（金）@大阪大学豊中キャンパス

第3回グループミーティング：2017年1月17日（火）@大阪大学豊中キャンパス

(6) 総合コミュニケーション学（2014年度採択）

1) 目的

従来社会科学的な研究対象であったコミュニケーションの問題を、生物学、情報科学、経済学、経営学、環境科学、物理学、複雑系科学、科学哲学等の諸分野の研究者間で共有し、幅広い分野の研究者が国際高等研究所における研究会・ワークショップに参加し議論を行う。そのような文理融合の学際的・包括的な研究交流を通じて総合コミュニケーション学の確立を目指し、コミュニケーションに関連する様々な社会問題の解決を図る。

2) 研究代表者

時田恵一郎 名古屋大学大学院情報科学研究科教授

3) 研究メンバー

上原 隆司 名古屋短期大学保育科助教

江守 正多 国立環境研究所地球環境研究センター室長

大平 徹 名古屋大学大学院多元数理研究科教授

小西 哲郎 中部大学工学部教授

阪上 雅昭 京都大学大学院人間・環境学研究科教授

佐々木 顕 総合研究大学院大学先端科学研究科教授

笹原 和俊 名古屋大学大学院情報科学研究科助教

佐藤 哲 人間文化研究機構総合地球環境学研究所教授

田中 沙織 国際電気通信基礎技術研究所（ATR）脳情報通信総合研究所
数理知能研究室室長

戸田山和久 名古屋大学大学院情報科学研究科教授

橋本 敬 北陸先端科学技術大学院大学知識科学系教授

早川 美德 東北大学教育情報基盤センター教授

福永 真弓 東京大学大学院新領域創成科学研究科准教授

藤本 仰一 大阪大学大学院理学研究科准教授

本城 慶多 国立環境研究所社会環境システム研究センター特別研究員

丸山 康司 名古屋大学大学院環境学研究科准教授

八代 嘉美 京都大学 iPS 細胞研究所特定准教授

4) 研究実績

2016年度の2回の研究会を通して、ヒトや生物のコミュニケーションに関する多面的な視点と様々な問題が明らかとなった。同時に、人文社会学者と科学者との間の共同研究コミュニケーションの問題も色々と顕在化したが、その困難を乗り越えて以下のような新たな共同研究が進みつつある。

①コミュニケーションを通じた在来の科学知と伝統的な地域環境知の知識流通のダイナミクスに関する理論モデル研究。進化生態学や環境社会学のみならず、経済学、経営

学へのフィードバックが期待される。

- ②コミュニケーションが果たす役割に関する非線形・非平衡物理学的研究。個体間の様々なコミュニケーションが、感染症の流行、選挙における投票行動、生物の群れや人間の群集のダイナミクスに果たす役割について、GIS(Geographic Information System: 地理情報システム)データなども用いた理論・実証研究を遂行中である。
- ③認知バイアス、対立と妥協、不信、詐欺、操作の特性を明らかにするための生物信号についての理論・実証研究。
- ④「協力の進化理論」とその「協力の社会工学」的研究への応用。

5) 研究会開催

第1回研究会：8月22日（月）～23日（火）@国際高等研究所

第2回研究会：2017年2月18日（土）～19日（日）@国際高等研究所

3. 研究企画推進会議

(1) 目的

研究事業の企画及び円滑な推進を図るため、所長の諮問機関として、研究企画推進会議を置く。会議は、以下の職務を行う。

・研究所の研究活動に係る諸課題に関する所長の諮問に応じた検討、所長への建議あるいは助言・提案

・その他研究事業の企画及び円滑な推進を図るために必要な事項

(2) 委員名簿

※任期：2015年4月～2017年3月

榎 裕之	豊田工業大学学長・東京大学名誉教授（委員長）
植田 和弘	京都大学大学院経済学研究科教授
小泉 潤二	大学共同利用機関法人人間文化研究機構監事・大阪大学名誉教授
小寺 秀俊	京都大学大学院工学研究科教授
佐伯 啓思	京都大学こころの未来研究センター特任教授・京都大学名誉教授
竹内佐和子	文部科学省顧問
西尾章治郎	大阪大学総長
西村いくこ	甲南大学理工学部教授
西本 清一	京都高度技術研究所理事長・京都市産業技術研究所理事長・京都大学名誉教授
廣岡 博之	京都大学大学院農学研究科教授
三嶋 理晃	恩賜財団大阪府済生会野江病院院長・京都大学名誉教授
安富 歩	東京大学東洋文化研究所教授

(3) 開催実績

【第1回（通算第3回会議）】

日時：2017年1月24日（火）9：30～ 12：30

場所：国際高等研究所セミナー2会議室

内容：2016年度研究事業の進捗確認、2017年度研究事業計画について総合的に検討

4. 基幹プログラム合同会議

(1) 目的

基幹プログラム全体として人類と地球全体の将来に向けた課題の解決に取り組むことを目指して、基幹プログラムの研究代表者及び主要メンバーから構成する合同会議を設置する。合同会議は、基幹プログラム間の情報交換や相互交流及び全体調整の役割を担うこととし、合同会議での検討内容が効果的に各基幹プログラムの進展に資するように企画運営を図る。4年目を目途に基幹プログラム全体を通じた総合的な報告の取りまとめを目指すこととし、合同会議では全体の目的の再確認、報告の内容、4年目までのロードマップ、補充すべきテーマと取り扱う時期等について検討を行う。

(2) 開催実績

【第1回】

日時：8月7日（日）10：00～ 17：30

場所：国際高等研究所セミナー1 会議室

出席者：※肩書は開催当時

長尾 真 国際高等研究所所長

<21世紀地球社会における科学技術のあり方>

有本 建男 国際高等研究所副所長、政策研究大学院大学教授

大竹 暁 内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官

狩野 光伸 岡山大学大学院医歯薬学研究科教授

宮野 公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授

<人類生存の持続可能性～2100年価値軸の創造>

佐和 隆光 国際高等研究所研究参与、滋賀大学特別招聘教授

一方井誠治 武蔵野大学工学部教授

加藤 博和 名古屋大学大学院環境学研究科准教授

小西 哲之 京都大学エネルギー理工学研究所教授

<多様性世界の平和的共生の方策>

位田 隆一 国際高等研究所副所長、滋賀大学学長

大芝 亮 青山学院大学国際政治経済学部教授

高阪 章 関西学院大学国際学部教授

<「けいはんな未来」懇談会>

松本 紘 国際高等研究所副所長、理化学研究所理事長

依田 高典 京都大学大学院経済学研究科教授・副研究科長

平田 康夫 国際電気通信基礎技術研究所（ATR）代表取締役社長

山下 晃正 京都府副知事

内容： 各基幹プログラムの報告

基幹プログラムの相互関連について

【第2回】

日時：12月25日（日）10：00～ 15：00

場所：国際高等研究所セミナー1 会議室

出席者：※肩書は開催当時

長尾 真 国際高等研究所所長

<21世紀地球社会における科学技術のあり方>

有本 建男 国際高等研究所副所長、政策研究大学院大学教授

大竹 暁 内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官

駒井 章治 奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科准教授

宮野 公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授

<人類生存の持続可能性～2100 年価値軸の創造>

佐和 隆光 国際高等研究所研究参与、滋賀大学特別招聘教授

一方井誠治 武蔵野大学工学部教授

小西 哲之 京都大学エネルギー理工学研究所教授

<多様性世界の平和的共生の方策>

位田 隆一 国際高等研究所副所長、滋賀大学学長

<「けいはんな未来」懇談会>

松本 紘 国際高等研究所副所長、理化学研究所理事長

平田 康夫 国際電気通信基礎技術研究所（ATR）代表取締役社長

山下 晃正 京都府副知事

高見 茂 京都大学大学院教育学研究科長・教育学部長

※「けいはんな未来」懇談会 専門検討部会座長

内容： 進捗状況と 2017 年度の計画

基幹プログラムの相互関連

共通の理念やテーマ

中間報告・最終報告の内容

社会への発信について

以上

付属明細書 2

公益財団法人国際高等研究所

2016 年度事業報告Ⅲ. ソーシャル・コミュニケーション活動の企画・実行

1. 「エジソンの会」の事業概要と活動実績

エジソンの会は、けいはんな学研都市が標榜する「立地機関間の連携とそれによる成果の創出」を促進するために、高等研が知的ハブとしての役割を果たし、立地機関の研究者や技術者のコミュニティーを形成し、具体的な「オープンイノベーション」の成功事例の確立に寄与することを目的として、2015 年度の準備活動を経て 2016 年 6 月 21 日（火）に正式発足し、本格的な活動を開始した。

2016 年度事業活動の実施概要は下記のとおりである。

[1] 「エジソンの会」を企画・運営する「企画委員会」及び「オブザーバー」の機関構成

【企画運営委員会】

国立研究開発法人理化学研究所
国立研究開発法人産業技術総合研究所
国立研究開発法人情報通信研究機構ユニバーサルコミュニケーション研究所
国立大学法人奈良先端科学技術大学院大学
国立大学法人滋賀大学
京都情報大学院大学
西日本電信電話株式会社
サントリーホールディングス株式会社
パナソニック株式会社
株式会社島津製作所
京セラ株式会社
オムロン株式会社
株式会社国際電気通信基礎技術研究所
国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構
日本電産株式会社
公益財団法人国際高等研究所

(順不同、16 機関)

【オブザーバー】

京都府
奈良県
木津川市
奈良市
精華町
国立国会図書館
公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構
公益社団法人関西経済連合会
公益財団法人京都産業 21

(順不同、9 機関)

(1) 第1回企画委員会

開催日：2016年12月6日（火） 13:00～14:30

会 場：国際高等研究所セミナールーム 216

内 容：

1) 「エジソンの会」これまでの状況の説明

国際高等研究所チーフキュレーター 黒須 悟士

2) 理化学研究所の取り組みについて

理化学研究所革新知能統合研究推進室室長 生越 満

3) 個別共同研究の動向について

①奈良先端科学技術大学院大学戦略企画本部 IR オフィス特任教授 野島 英雄

②サントリースシステムテクノロジー㈱ 先端技術部課長代理 高木 基成

③㈱島津製作所基盤技術研究所データ処理ユニット長 上野 功裕

④㈱オムロン技術・知財本部企画・CTO 支援室長 勅使川原正樹

4) オブザーバーとしての支援体制について

5) これからの取り組みについて

6) 自由討議

[2]AIの実用化に向けた勉強会の実施

2016年度は月次会合を下記のとおり8回開催した。

(1) 第1回会合

開催日：2016年6月21日（火）

内 容：AIの最新動向及び知識の共有化を図る。

講 師：長尾 真 国際高等研究所所長

テーマ：「これからの人工知能」

講 師：金出 武雄 カーネギーメロン大学教授

テーマ：「実世界システムとしての人工知能」

(2) 第2回会合

開催日：2016年7月22日（金）

内 容：理化学研究所等の国立研究機関や大学とそれぞれの研究開発成果を理解する。

講 師：杉山 将 理化学研究所革新知能統合研究センター長

テーマ：「人工知能研究の現状とこれから取り組むべきこと」

講 師：竹村 彰通 滋賀大学データサイエンス教育研究センター長

テーマ：「データサイエンスの展望」

(3) 第3回会合

開催日：2016年8月29日（月）

内 容：AIにおけるIBMの最新技術動向及び先端適用事例を紹介する。

講 師：久世 和資 日本IBM執行役員研究開発担当

テーマ：「IBMの考えるコグニティブ・コンピューティング」

講 師：高木啓伸 IBM 東京基礎研究所

テーマ：「Accessibility ignites innovation」

講 師：山道新太郎 IBM 東京基礎研究所 サイエンス&テクノロジー担当

テーマ：「IBM の最新テクノロジーのご紹介」(Neuromorphic chips／World's Smallest Computer)

(4) 第4回会合

開催日：2016 年 10 月 3 日 (月)

内 容：産業技術総合研究所における AI への取り組み及び自然言語認識の現状と課題を理解する。

講 師：辻井 潤一 産業技術総合研究所人工知能研究センターセンター長

テーマ：「実世界に埋め込まれる人工知能」－ AIRC の紹介 －

講 師：乾 健太郎 東北大学大学院情報科学研究科教授

テーマ：『「行間を読む」言語理解のための知識と推論-1』

講 師：関根 聡 ニューヨーク大学准教授

テーマ：『「行間を読む」言語理解のための知識と推論-2』

(5) 第5回会合

開催日：2016 年 11 月 2 日 (水)

内 容：AI 先進企業での具体的な活用事例と今後の展開に対する理解を深める

講 師：株式会社アドバンスト・メディア

テーマ：「未来のコミュニケーション ～Augmented Intelligence～」

講 師：データセクション株式会社

テーマ：「AI を活用したビジネスの最前線及び、その技術」

講 師：株式会社 Nextremer

テーマ：「人工知能の未来は明るい しかし今日（現実）の先にしか未来はない」

講 師：株式会社 FRONTEO

テーマ：「FRONTEO の人工知能 KIBIT（キビット）のご紹介」

講 師：株式会社 Preferred Networks

テーマ：「新しいプログラミングパラダイムとしての機械学習」

(6) 第6回会合

開催日：2017 年 1 月 25 日 (水)

内 容：インダストリー4.0 による産業構造の変化と AI の具体的なビジネス面での応用を通し、データ駆動型へと移行するビジネス・エコシステムの転換について理解を深める。

講 師：関 啓一郎 総務省近畿総合通信局局長

テーマ：「AI や IoT が駆動する Industry4.0 とそれによる産業構造の変化」

講 師：谷口 恒 株式会社 ZMP 代表取締役社長

テーマ：「自動運転技術の応用」

(7) 第7回会合

開催日：2017年2月14日（火）

内 容：AIの進展に伴い、仮説駆動型からデータ駆動型への発想の転換が求められる中、データ駆動型の社会やビジネスのあり様を探る。

講 師：北野 宏明 ソニーコンピュータサイエンス研究所 代表取締役社長

テーマ：「Nobel Turing Challenge」

講 師：齊藤元章 PEZY Computing 代表取締役社長

テーマ：「次世代スパコンと人工知能エンジンによる、AI 駆動科学の時代に向けて」

(8) 第8回会合

開催日：2017年3月28日（火）

内 容：生命科学や人工知能の進展が社会構造や産業構造に如何に影響を与え、何が起きているのかを探る。

講 師：中村桂子 JT 生命誌研究館館長

テーマ：「生命誌から見た AI ― 情報を切り口に ―」

講 師：須藤 修 東京大学大学院情報学環教授

テーマ：「AI ネットワークの社会的影響と課題」

以上

2. 「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ"ゲーテの会"」事業概要と開催実績

高等研の知的資源と人的ネットワークを活用して、知的連携の促進とそのための土壌醸成を図ることを目的として、「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ“ゲーテの会”」を2013年度に立ち上げ、原則として毎月の満月の夜に公開セミナーを企画・開催している。

現在では、けいはんな学研都市に立地する法人や企業の関係者、近隣住民など、広く一般を対象とし、40名程度を上限として参加者を募っている。リピーターも増え、人的ネットワークに基づいて京都市内や大阪市内など、より広範囲の地域からの参加者も認められるようになった。

2016年度は、前年度から引き続き、「日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－」をテーマに掲げて、日本の近代化を導いた偉人の思想、行動の光と影を追う企画として、特に「西の文化」の彼方に「東の文化」を想像した人物を取り上げて展開した。

2016年度は12回の定例開催により延べ408名の参加者を得て、1回当たりでは平均34名と安定した活動実績を示した。

（1）第34回：2015年4月21日（木）

講演：南方熊楠のマンダラ的世界観の形成

～那智滞在期の思想とその前後をつなぐもの

講師：松居 竜五 龍谷大学国際学部教授

内容：南方熊楠（みなかた・くまぐす、1867-1941）が土宜法龍（どぎ・ほうりゅう、1855-1923）に宛てて1903年の夏に書いた手紙には、「南方マンダラ」と呼ばれる独自の世界観が披露されている。この「南方マンダラ」において、熊楠は科学的な思考の枠組みを大乘仏教の思想を用いて広げようと試みた。その一方で、従来、これらの書簡における試論は、那智での滞在期に限定されるものであり、熊楠の思想の全体像を示すものではないという見方もあった。

しかし、和歌山・東京からアメリカ、ロンドン、那智、紀伊田辺と移動しながら形成された熊楠の思想の流れを踏まえ、「南方マンダラ」が徐々に準備され、その後の学問活動においても一定の基盤となっていたことがわかる。今回の講演では、こうした観点から、南方マンダラの形成過程とその後の展開について、最近発見された資料や新たな研究的視角を紹介しつつ述べ、意見交換した。

参加者：38名

（2）第35回：2016年5月24日（火）

講演：西田幾多郎と近代日本

講師：佐伯 啓思 京都大学名誉教授

内容：西田幾多郎は、明治3年（1870年）に生まれ、昭和20年（1945年）に没の正に「近代日本」を代表する哲学者であり、思索家であった。西洋哲学への深い造詣を基に、日本独自の哲学の構築を模索した。京都帝国大学に赴任したのが41歳で、その次の年に出版された「善の研究」は、まさに西田哲学の出発点であるだけではなく、日本人の手になる最初の体系的な哲学書といってよい。ここで提出された有名

な「純粹経験」の概念を発展させて、「絶対無」や「無の場所」という独特の考えを導き出した。

「無の哲学」ともいわれる西田哲学は、超難解だとしばしばいわれる。しかし、「無の哲学」の「無」という観念は、われわれ日本人には論理を超えて直感的にわかるところがある。「神」のような「絶対的な存在」から出発する西洋の思想に対比すれば、われわれには、物事の根底には「無」がある、という思想は比較的なじみやすい。この講義では、西田哲学の詳細な解説ではなく、その輪郭を論じ、日本思想との連関に触れることを試み、意見交換した。

参加者：37名

(3) 第36回：2016年6月20日（月）

講演：西條八十と昭和時代（上）

講師：筒井 清忠 帝京大学文学部教授・文学部長

内容：西條八十は1892（明治25）年に生まれ1970（昭和45）年に亡くなった詩人・童謡作家・新民謡作家・少女小説家・歌謡曲作詞家・文学研究者（早稲田大学仏文科教授）である。最初三木露風派の詩人として出発したが、夏目漱石門下の鈴木三重吉の始めた雑誌『赤い鳥』に載せた詩『かなりや』が初めて曲のついた童謡となり一世を風靡し、北原白秋・野口雨情とともに三大童謡作家の一人となった。著名な詩人金子みすずは西條八十によって育てられた一人である。

一方、ソルボンヌ大学に留学、早稲田大学文学部で教授としてフランス文学を講じた。新民謡・少女小説も書き、昭和に入ると『東京行進曲』を皮切りに、『東京音頭』『旅の夜風』（映画『愛染かつら』主題歌）『支那の夜』『誰か故郷を想はざる』『蘇州夜曲』『若鷺の歌』（予科練の歌）『同期の桜』『青い山脈』『越後獅子の唄』『この世の花』『王将』『花咲く乙女たち』と戦前から戦中を経て高度経済成長期に至るまで多くの愛唱歌を作り、昭和の日本人を慰め励まし続けた。当時第一級の知性として芸術院会員となりつつ「日本の庶民に寄り添った知識人」でもあった西條八十の生涯を、歌や映画を通して振り返りつつ考察し、意見交換した。今回は前篇として昭和戦前期までを扱った。

参加者：33名

(4) 第37回：2015年7月20日（水）

講演：日本のものづくりの源流～田中久重を生んだ江戸時代再考

講師：鈴木 一義 国立科学博物館 産業技術史資料情報センター長

内容：東芝の創始者である田中久重は、寛政11年(1799)に鼈甲細工職人の子として生まれ、長じてからくり儀右衛門として和時計の最高傑作「万年時計」や「弓曳童子」等々、人々を驚かす様々な発明、工夫を行った。幕末には佐賀藩精煉方に招かれて欧米科学技術に挑み、維新後は70歳を超えて東京に出て東芝の始まりを興した。この職人としての波瀾万丈、自由奔放な一生。それが可能だった江戸時代とは、どのような時代だったのだろうか？

260年に及ぶ平和な社会が続いた江戸時代。平和な社会が実現されたことで、鉄砲や刀の技術が農具生産に使われるなど、知識や技術は一部に独占されることなく、広く社会、人々へ伝えられた。また江戸幕府は、基本的に諸藩の上に君臨しつつも、

過度な支配・干渉は行わず、各地域は諸藩により自主的に統治され、それぞれの地域が繁栄を競って、身分の上下を問わず勤勉や勤労が勧められたため、庶民にとっても「読み書き算用は世渡りの三芸」は当たり前のことだった。久重を生んだ江戸時代とは、この平和な社会と知的好奇心に溢れた人々によって、今日まで繋がる日本の技や美、ものづくりの源流がつくられた時代であったことを振り返り、意見交換した。

参加者：42名

(5) 第38回：2016年8月18日（木）

講演：天心・岡倉覚三

講師：稲賀 繁美 国際日本文化研究センター副所長・総合研究大学院大学教授

内容：『茶の本』（1906）出版から百年、さらに没後百年（2013）などを迎えて、近年、岡倉天心の研究はふたたび隆盛を見せてきた。その一端は、『別冊太陽・岡倉天心』（2013）の巻にも、盛り込まれている。危険な国粹的汎アジア主義の扇動者といった評価は、敗戦後の思想史研究の偏りとして一掃されたに等しく、その反対に当時の国際情勢下天心の思想と行動を据えなおす学術的努力が成果を結ぶようになってきた。それを3点にまとめてみよう。ひとつには東洋美術という概念を西欧世界に定着させた国際的美術行政担当者としての位置づけ。ボストン美術館での活躍の背景には天心の「支那・印度」体験が無視できまい。第2には、とりわけインドでの宗教刷新運動との関わり。シカゴ万国宗教議会で一躍注目をあつめたヴィヴェカーナンダ（ベンガル名ビベカノンド）との触発から、般若波羅蜜多会を日本で開催しようとした天心らの周囲の動きが、近年、再発掘されてきた。第3には『茶の本』の思想的な射程。九鬼周造らへの伝播も含め、西洋思想に対峙した東洋近代思想の動きには、今日的な意義が再認識されつつある。そこには若き日にシカゴはポール・ケイラスのオープン・コートで仏典翻訳出版事業に挺身した、大拙・鈴木貞太郎も絡まってくる。『道德経』の「道」は近代の東西思潮の交流のなかでいかなる変貌と再解釈を遂げたのか。その思想的・造形的・宗教的意義を問い、意見交換した。

参加者：36名

(6) 第39回：2016年9月16日（金）

講演：天地の人・三浦梅園

講師：小川 晴久 東京大学名誉教授

内容：人は天地の人、道は天地の道、善悪は天地の善悪、是非は天地の是非。

三浦梅園（1723～1789）は10歳以前から天地（自然）の現象に目をみはり、その仕組みに関心を持ち続けた。23歳の時長崎旅行や『天経或問』という書を通して地の球体を知るが、西洋も天地の仕組みは未解明と感じ、探究を続け、30歳の時「氣に観るあり、天地に条理あるを知る」と達観して、「一即一一、一一則一（一有二、二開一）」という条理と反観合一法という認識法で天地の仕組みの叙述を始め、23回書き直し、23年掛けて『玄語』（漢文）という書に完成させた。『玄語』の天冊は天神、本神などの条理語で構成され、難解を以て知られる。2023年の梅園生誕300年に向けて、その難解な書を解明しようと梅園学会（41年目を迎える）は昨年从那それに集中しているが、本講演では梅園の天人の分と天人の合の視点と彼の人間観

を紹介する。人間は自然（天）の一部であるが、人間には意識があって、無意の自然（天）とは違い（分）がある。この分は人間の能動性という肯定面を持つが、人間の主観で全てを見るという否定面を持つ。「其うたがひあやしむべきは変にあらずして常の事也」という有名な彼の懐疑精神は、人間中心の認識全てに向けられていた。梅園は人間を「人道を以て人と為る」側面と「天道に順（したが）って人と成る」側面の統一と見たが、現代人は後者の側面がほとんど理解できなくなっているのではないかとの問題提起を行い、意見交換した。

参加者：24名

（7）第40回：10月17日（月）

講演：西條八十と昭和時代（下）

講師：筒井 清忠 帝京大学文学部長・大学院文学研究科長

内容：第36回ゲートの会（6月20日開催）で扱った西條八十を取り上げ、昭和時代を背景とする「日本の庶民に寄り添った知識人」西條八十の生涯を振り返り、その意味を考察し、意見交換した。今回は後篇として昭和戦中期から死去までを扱った。

参加者：26名

（8）第41回：11月14日（月）

講演：日本の天文学の近代化と麻田剛立

講師：嘉数 次人 大阪市立科学館学芸員（学芸担当課長）

内容：江戸時代の天文学者・麻田剛立(1734～1799)は、九州の杵築藩主の医師として勤めていたが、天文学に打ち込みたいという強い思いから、39歳の頃に杵築から大坂に出て研究に専念したという異色の経歴の持ち主である。同時に、18世紀の日本において非常にユニークな視点を持った天文学者であった。

古代から江戸時代末までの日本の天文学は、中国の天文学の考え方の強い影響を受け、毎年の暦を作ることや天文占いを主要な目的としていた。そのため研究者たちは、宇宙がどのような構造をしているのか、天体とはどのようなものなのか、などといった事に関心を持たなかった。そのような時代の中で剛立は、18世紀中ごろから日本に伝わりはじめた西洋天文学の影響を受けることになる。そして、西洋天文学の成果を利用した暦法の編纂に注力した。また剛立は、夜空に輝く天体の観察を通じて、月のクレーターの深さを推定したり、月食時に見える影の形から地球の地形について考察したりするなど、当時の天文学者が持たなかった近代的な視点で宇宙を見つめた。

江戸時代の天文学は、古代から続いてきた伝統的な考え方が、西洋天文学の流入と共に少しずつ発展・変化をした時代である。本講演では、麻田剛立の業績紹介を中心として、江戸時代の天文学の視点と、その発展の様子を概観するし、意見交換した。

参加者：37名

（9）第42回：12月16日（金）

講演：小野蘭山と日本のナチュラリストリー

講師：岩槻 邦男 東京大学名誉教授

内容：小野蘭山は享保 14 (1729) 年に生まれ、文化 7 (1810) 年に没した本草学者、「日本のリンネ」などといわれることもある。25 才で京都に私塾衆芳軒を開き、多数の門弟のうちには杉田玄白、飯沼慾斎、谷文晁などの著名人の名も見られる。中国本草学の集大成といわれる李時珍の『本草綱目』にもとづいて日本の本草 1882 種をまとめた『本草綱目啓蒙』48 巻を、75 才になって脱稿した。日本のナチュラリストリーの歴史のうちで蘭山が占める位置を考察し、その後の文明開化の時代に及ぼした影響をたずねる。

中国の本草学を取り入れた深根輔仁 (898~922) の『本草和名』がすでに日本風の修正を施していたが、日本における自然の記述は『万葉集』などの古典からも直接に受け取ることができる。平和が続いた江戸時代には、貝原益軒 (1630~1714) に始まるナチュラリストリーの健全な発展があり、西欧の進んだ自然史研究の成果が、蘭学や洋学の名で、キッチリ取り入れられていた。

飯沼慾斎 (1782~1865) や伊藤圭介 (1803~1901) から、東京大学が創設され、やがてイチョウの精子の発見などの成果につながる近代科学の日本での発展を、西欧との対比で考察し、意見交換した。

参加者：34 名

(10) 第 43 回：2017 年 1 月 11 日 (水)

講演：「走れメロス」と「坊っちゃん」

講師：田島 正樹 千葉大学文学部元教授

内容：太宰治の『走れメロス』は、理想の友情を描いた作品として有名であるが少し変なところもある。身代わりになったメロスの友人セリヌンティウスは、たった一度、メロスが帰ってこないかもしれないと疑ったと言う。メロスをよく知る親友なら、メロスがおよそどのような場面でどのようなことをするかはわかっていたはずである。それなら帰ってこなかったとしても、それなりのやむを得ぬ理由があったのだろうと思うのが普通ではないか。

他方、夏目漱石の『坊っちゃん』も、見方によっては友情を描いたものと言うことができる。同僚のうらなり君が、赤シャツたちから不当な扱いを受けたのに憤慨して、連帯して制裁を加える話だからである。

両作品の主人公は、無鉄砲な、どちらかといえばやや無分別な若者という点で、似た所がある。友情を描くには、思索的タイプよりは、行動的タイプの方がぴったりということであろう。この両作品を友情という点で比較対照することで、友情の本質とは何か、『走れメロス』において隠蔽されているものは何なのかについて考察し、意見交換した。

参加者：34 名

(11) 第 44 回：2017 年 2 月 10 日 (金)

講演：「明治の精神」としての内村鑑三

講師：新保 裕司 都留文科大学教授

内容：「明治の精神」の典型的存在は、近代日本の代表的基督者、内村鑑三に他ならない。

徳富蘇峰は、「内村さんのような人が明治に産出したことは明治の光だと思う。」と 90 歳のときに語った。内村は、『代表的日本人』の「独逸語版跋」の中で「此書は、現在の余を示すものではない、これは現在基督信徒たる余自身の接木せられてゐる

台木の幹を示すものである。」と書いた。この「台木」とは、単に歴史的教養を意味しているのではない。人格的なものにまで形成されたエトスとパトスの蓄積である。そして、その蓄積を回想し、自覚している精神である。

「明治の精神」は、「台木」を持っているだけでは生まれない。何ものかが、「接木」されなくてはならないのである。内村鑑三の場合は、いうまでもなく「基督教」が接木されたのであり、福澤諭吉の場合は、「文明」が、岡倉天心の場合は、「フェノロサの眼」が、中江兆民の場合は、ルソーが、夏目漱石の場合は英文学が、といった具合に、それぞれの「台木」の個性と宿命に応じて様々なものを「接木」したのである。

「明治の精神」が生き生きとしていたのは、大体、日露戦争の勝利までであろう。それ以降、この劇的な精神は次第に薄れていく。自然主義、大正デモクラシー、マルクス主義、戦時下の日本主義と移り変わり、やがて敗戦を迎えた。そして、戦後70余年とは、精神的エネルギーを鍛えることなく、今日の空虚な日本、三島由紀夫のいわゆる「無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の」日本に墮していくだけの時間であった。

ますます深刻化する危機の中にある日本を立ち直らせるためには、「明治の精神」の代表的存在である内村鑑三を深く理解し、そこから精神的エネルギーを汲みとらなければならないと説いて、意見交換した。

参加者：33名

(12) 第45回：2017年3月14日（火）

講演：「湛山回想」を読む

講師：猪木 武徳 大阪大学名誉教授・国際日本文化研究センター名誉教授

内容：1956年12月23日、石橋内閣は全閣僚を総理が兼任して親任式に臨むという異例のスタートを切った。その2か月後、病のため辞意を表明、石橋内閣は総辞職する。戦前、透徹した自由主義思想の言論人として健筆をふるった石橋湛山は、当時の日本を代表する優れた知識人でもあった。しかし今日ではその進歩主義的な側面のみが強調されることが多い。本講義では『湛山回想』を素材にしつつ、彼の軍隊の見方、普選運動への姿勢、地方自治重視のデモクラシー観、植民地論、中国観などを取り上げて解説された。彼はなぜ戦後公職追放されたのかについても、占領下の政界の複雑さが見え隠れする。その潔い引退を政治家としてどう評価するのか。メディア経営者、思想家、政治家としての石橋湛山の実像を考察し、意見交換した。

参加者：34名

以上